



web版 図書館 しが

琵琶湖を駆けた船の歴史

「うみのこ」とフローティングスクールについては次ページも Check !

学習船「二代目」「うみのこ」が昨年、初めてのフローティングスクールに出航しました。県内の小学生にとっておなじみの「琵琶湖の上での体験学習」は、琵琶湖とそこに根付いた「船」の文化があってこそものかもしれません。近代以前は水上交通と物流のために、そして現代は観光やレジャーにと、琵琶湖から船影が消えたことはありません。今回はそんな琵琶湖に浮かぶ船の歴史についてご紹介します。

丸木船から構造船へ

万葉集の時代から琵琶湖には多くの港があり、船が往来していました。最初は一本の丸太をくりぬいただけの「丸木船」でしたが、やがて複数の部品を組み合わせた複雑な船が登場します。

近年、長浜市・塩津で平安時代のものとみられる船板が発見されました。この頃はまだ丸木船の時代と考えられており、板を組み合わせて船体を作った「構造船」として、最古級の遺物である可能性があります。

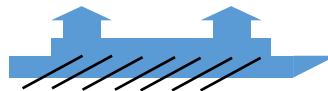


塩津港遺跡から出土した船板

2015 年に出土し、修復作業ののち、滋賀県埋蔵文化財センターで展示されています。釘穴や水漏れの修理跡などが確認できます。

写真提供：滋賀県教育委員会

戦国武将も重視した水運



古代から盛んに船が琵琶湖を行きかっていた理由は、水運にあります。鉄道もトラックもない時代、大量の物資を輸送するには船が最適でした。都である京都・奈良と北陸や東国をつなぐ琵琶湖は、まさに物流の大動脈と言えました。

そして織田信長、豊臣秀吉の時代には、長浜城、安土城、大津城など、琵琶湖に面した水城が複数築かれます。琵琶湖の物流を掌握することが、政治的・軍事的にも重要な意味を持っていました。そんな中でも異様な存在感を放つのは、信長が建造させた大型船です。現代のミシガンにも匹敵する巨大さの「信長の大船」は、実際に対岸の高島攻撃にも使用されたと言われていました。しかしこの大船は、船というより浮かぶ城であり、実用性は乏しかったらしく、わずか4年で解体の憂き目にあいました。

同じころ出現したのが、その後の江戸時代を中心に活躍した「丸子船」です。水深の浅い琵琶湖に合わせて、船底の断面はゆるやかに丸みを帯び、喫水(水面下に沈む部分)が抑えられているほか、淡水ゆえに浮力が小さいことを補うため、両側面には「オモギ」と呼ばれる太い木を取り付けるなど、琵琶湖で使うための独自の工夫がされています。板を斜めに張り合わせて船首を形づくる「ヘイタ」も、丸子船をはじめとする琵琶湖の船の特徴のひとつです。



琵琶湖博物館に展示される丸子船

1990 年代に琵琶湖の船大工によって復元されたもので、博物館まで湖上航海も行いました。

写真提供：滋賀県立琵琶湖博物館

丸子船の大きさは様々で、もっとも標準的なサイズである百石積（全長 17m程度）から、大型のものは五百石積、小型のものは五十石積程度のものまであり、物資の運搬や人の移動など多目的に用いられました。最盛期の船数は 1300 艘にもものぼり、まさに湖畔の人々の生活に密着した船でした。

蒸気船の登場と鉄道連絡船



明治 2 年（1869 年）、琵琶湖で最初の蒸気船「一番丸」が進水します。これまでのように人や風の力に頼ることなく航行できる、動力船の登場です。帆走船をしのぐスピードと馬力を持つ蒸気船は、当時の人々にとって革新的で、一時、反対運動もありましたが、わずか 5 年後には 15 隻まで急増しました。

汽船にとって転機となったのは、鉄道の出現でした。明治 13 年（1880 年）に京都～大津間の鉄道が開通すると、汽船は鉄道のない大津～長浜間の運輸を担う「鉄道連絡船」として、鉄道との共存関係を築きます。しかし、この関係は長く続きませんでした。鉄道に比べて天候の影響を受けやすい汽船は、明治 22 年（1889 年）の東海道線全線開通によって斜陽に追い込まれます。蒸気船の登場から 20 年あまり、古代から続く琵琶湖水運の歴史から見れば、ほんの一瞬の熱狂と衰退と言えるかもしれません。

観光への舵切り



物流・旅客とも鉄道に奪われた汽船は、その活路を観光に見出します。明治末期から「近江八景めぐり」「竹生島めぐり」などの定期遊覧コースが始まり、大正 11 年（1922 年）には初の純遊覧船である「みどり丸」が就航します。全長 45m の巨体に絢爛豪華な内装を施した「みどり丸」は、「運ぶ」船から「楽しむ」船へ、琵琶湖における船の役割の変化を象徴するかのようです。

昭和初期には開設まもないスキー場への直行便「スキー船」が人気を博します。戦後から現代にかけても「玻璃丸（1951 年）」「ミシガン（1982 年）」「ビアンカ（1990 年）」と大型船が

デビューし、京阪神から気軽に行ける観光スポットとして、琵琶湖の遊覧船は今に続く人気を獲得しました。

【参考文献】『湖の城・舟・湊』太田浩司著 サンライズ出版 2018 年 S-2180-18、『琵琶湖の船が結ぶ絆』滋賀県立安土城考古博物館 2012 年 S-6880-12、『琵琶湖の船 丸木舟から蒸気船へ』大津市歴史博物館 1993 年 S-6880-93、『航跡 琵琶湖汽船 100 年史』琵琶湖汽船株式会社 1987 年 S-6800-87、『おうみ文化財通信 vol.27, vol.29, vol.35』滋賀県文化財保護協会 2016 年・2018 年



竹生島に着岸する「みどり丸」

来日中だったイギリス皇太子が、処女航海に乗船したことで話題となりました。ライバルの「京阪丸」と人気を競い合いました。

当館提供デジタルアーカイブより



平成 30 年（2018 年）に就航した「二代目」うみのこ
写真提供：滋賀県立びわ湖フローティングスクール

二代目就航！学習船「うみのこ」

学習船「うみのこ」もまた、現代の琵琶湖で活躍する船です。

初代「うみのこ」は昭和 58 年（1983 年）8 月に、全国初の「浮かぶ学校」として就航し、35 年にわたってびわ湖フローティングスクールを実施してきました。船上では、県内の小学生 5 年生が 1 泊 2 日の共同生活をおくりながら、教室ではできない様々な体験学習を行います。

これまでに 55 万人以上の児童が乗船し、最近では親子二代の乗船も珍しくないそうです。そんな中、二代目となった学習船「うみのこ」には、湖底を観察できる水中カメラや、タブレット PC に接続できる電子顕微鏡など、新しい学習ツールが多数導入され、よりいっそう琵琶湖をリアルに感じられる船となりました。

【参考文献】『湖の子誕生 建造記録』滋賀県立びわ湖フローティングスクール 1984 年 5-MA33-84
『フローティングスクール指導解説』滋賀県立びわ湖フローティングスクール 2018 年 SB-MA33-18
朝日新聞 1983 年 6 月 10 日付朝刊『子らの研修へ出港間近 県びわ湖フローティングスクール「うみのこ」ほぼ完成』

今月の book★まーく

参考資料室に加えて、一般資料室にも拡大読書器を設置しました。文字の拡大はもちろん、白黒反転など色を変えることもできます。また、マスキングやラインで読みたい部分を強調する機能も備えています。



(写真：拡大読書器)

さらに、一般資料室・参考資料室には助聴器を置いています。助聴器は、耳にあてると人の声が聴きやすくなる機器です。

これらの機器はどなたでもご利用いただけます。

より使いやすく居心地の良い図書館を目指して、新設したコーナーをご紹介します。

2月13日には、農林中央金庫大阪支店様より県産材を使った木製品をご恵贈いただきました。児童室の入口近くにはパンフレット台と書架、カウンター前にはベンチを置いています。また、各展示コーナーにはブックトラックと書架が入り、より充実した展示コーナーになりました。ちしきの本と読み物の書架の上には表紙見せの棚を追加しました。木のぬくもりが感じられ、より明るい雰囲気になった児童室をぜひご利用ください。

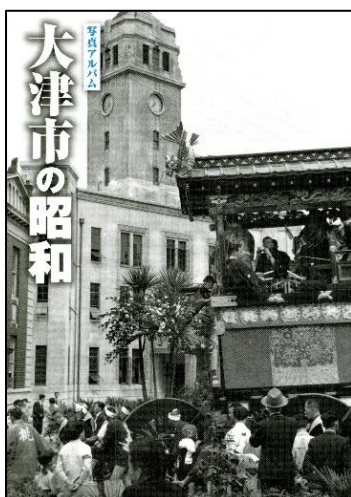


(写真：展示用ブックトラックとベンチ)

湖国の本棚

『大津市の昭和：写真アルバム』

樹林舎 2018年12月刊 (9,250円+税)



本書には、600点におよぶ大津市の「昭和」を記録した懐かしい写真が収録されています。戦争ごっこに興じる幼稚園児、「慎太郎刈り」の若者、新旧駅舎が並んだ大津駅など、「昭和」を色濃く反映した写真は、読者を一気にその時代へと導きます。

写真はテーマごとに並べられ、すべてに分かりやすい解説が付いています。コラムや年表なども充実していますので、読み物としても楽しめます。

大津市の「昭和」を語る写真1枚1枚に映し出された人々の笑顔が、この本の何よりの魅力です。

郷土資料紹介 平成30年11月～平成31年2月購入・寄贈分より

書名	著者	出版者	出版年	請求記号
比叡山の僧兵たち 鎮護国家仏教が生んだ武力の正当化	成瀬龍夫／著	サンライズ出版	2018.12	S-1811-18
近世への扉を開いた羽柴秀吉 長浜城主としての偉業を読む	太田浩司／著	サンライズ出版	2018.10	S-2461-18
小谷山古城 北近江の戦国	丁野永正／著	サンライズ出版	2018.12	S-2461-18
霸王信長の海琵琶湖	中井均／著 太田浩司／著 松下浩／著	洋泉社	2019.1	S-2480-19
図説明智光秀 オールカラー!	柴裕之／編著	戎光祥出版	2019.1	S-2811-19
近江が育んだ九二万石の大名 蒲生飛騨守氏郷とキリスト教	寺脇不信／著	講談社エディトリアル	2018.11	S-2845-18
三島池の郷 池下物語	池下区史編纂委員会／編集	池下区再発見プロジェクトチーム	2018.11	S-2962-18
ルポ企業墓 高度経済成長の「戦死者」たち	山田直樹／著	イースト・プレス	2018.11	S-3392-18
関ヶ原合戦を読む 慶長軍記翻刻・解説	井上泰至／編 湯浅佳子／編	勉誠出版	2019.1	S-3902-19
難病患者運動「ひとりぼっちの難病者 をつくらない」滋賀難病連の歴史	葛城貞三／著	生活書院	2019.1	S-4900-19
戦国の城の絵事典 見て楽しむ	中井均／監修	成美堂出版	2019.3	S-5200-19
30の名城からよむ日本史	安藤優一郎／著	日本経済新聞出版社	2018.12	S-5211-18
ロケットエンジンと、宇宙への憧れ	小鍵幸雄／著 小島隆夫／監修	渡辺出版	2018.11	S-5311-18
日本の美しい酒蔵	木下光／著 東野友信／著 前谷吉伸／著	エクスナレッジ	2018.12	S-5800-18
「技あり!」の京阪電車 創意工夫のチャレンジ鉄道	伊原薫／著	交通新聞社	2018.12	S-6806-18
サンタようちえん	上原結子／作画	イースト・プレス	2018.11	S-7212-18
めぐる森の物語	いまいあやの／文・絵	BL出版	2018.10	SB-7241-18
近江の観音様をたずねて 白柳栄一 版画集	白柳栄一／著	白柳栄一	2018.12	SB-7300-18
THE WHITE EGRET 琵琶湖 55 しらさぎ幻想 マツシマススム写真集	マツシマススム／著	日本写真企画	2019.1	S-7400-19
北に生きる猫	土肥美帆／著	河出書房新社	2018.11	S-7421-18
甲賀忍者考 鵜飼家関係文書を紐解く	鵜飼武彦／著	ユー・アイ・シー出版	2019.1	S-7830-19
百の手すさび 近代の茶杓と数寄者往来	池田瓢阿／監修 MIHO MUSEUM／企画・編集	淡交社	2018.11	SB-7933-18
百花遊歴	塚本邦雄／[著]	講談社	2018.11	S-9042-18
レギオニス 興隆編	仁木英之／著	中央公論新社	2018.10	S-9500-18
神遊の城	赤神諒／[著]	講談社	2018.12	S-9530-18

ホームページの[新刊図書案内](#)にて郷土資料の新作図書のリストをご覧ください。